In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	所謂環濠聚落について ： 大和平野を中心として見たる
Author	村松, 繁樹
Citation	人文研究. 1 巻 12 号, p.1-21.
Issue Date	1950
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大學法文學部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

所謂環濠聚落について

——大和平野を中心として見たる——

村松繁樹

一

「やまとは國のまほらば、たゝなづく青垣山こもれる」と詠ぜられたように、古くわが國の中央部に位置して、四周を山地でとりかこまれた大和平野は、上代社會の展開舞臺としてその面積も廣からず狹からず、好個の生活環境を提供した。周知のように、そのことは、この地域に考古學的遺蹟や遺物のとりわけ多いことがそれを物語つている。かくて大和平野が日本文化圏の核心をなしてきたことは、またわが國上代文獻にも明らかなところで、このようなことは、改めてこゝに諜々するの要はない。こうしたことはこの地の現在の文化景觀にも、よくにじみ出ているのである。それは日本民族の文化遺産であるところの神社や佛閣、さてはその内部に藏せられた數々の佛像を始めとする諸々の藝術品などは、もとよりさることながら、われわれはこゝに庶民の日常生活の見象的な表われであるところの、地表に刻印された文化景觀の中にも、これを認めることができるのである。

このような大和平野の文化景觀を特色ずけるものは、營々として人間が作り上げた耕地、そこにまさしく東西南北の縱横に通ずる道路、それらの間にほゞ一キロぐらいの距離を隔てゝ碁布されている聚落であり、またこの聚落を構成している民家である。白壁造りの大和棟または箱棟をおも家とする民家が、白壁のいくつかの土藏・納屋・表・裏の門、建物のない部分は土塀にとりかこまれた姿は、關東平野あたりの屋敷林にかこまれた草葺きの民家と、著しい對照を示

している。狹い小路を東西・南北に通じ、それに袋小路を通じて二・三十戸の民家が密集した大和平野の村々は、關東や東北あたりの村落とは違つて、その外形は方形または矩形を示すものが多く、中には村の外側を堀で繞らしているものもある。(1)

二

わが國における近代地理學の開拓者であられた小川琢治博士は、かゝる大和平野の村落を、日本村落の特色ある形態として注意し、これに垣内式村落と名づけられた。(2)

小川博士のいわゆる垣内式村落の一要件は、聚落の周圍に塀を繞らすことである。すなわち大和平野では、その外を周らすに幅約二歩（十四尺許）の堀を以てし、その四面に各一門（木戸口）を設けたもので、その内に含まれた戸口は二十戸ばかりであつたと推測さるとして、隋書食貨志を引用して、近畿地方における村落の成立を隋・唐制の範によれるものとし、かゝる形式は支那式に設計された平城京と同じく、大陸から移住した歸化民の灌漑用の池沼などを開く頃に、農村までも大陸そのまゝの形式に作つたと推定し得るとされている。

これに對して地方史研究の權威で、とりわけ土地及び聚落史の研究に異常な興味と熱心とをもたれていた牧野信之助氏は、近畿地方特に大和・河内・攝津・和泉あたりの平地に、なお多く堀の遺構を嘱目せられ、またかつて存在した渠濠を以て部落を圍繞せる特色を把握して、この種の堀を有する聚落を環濠聚落と名づけられた。そしてこの名稱を以て、氏のいわゆる散居制村落と共に、日本村落型の二つの代表的なものとされたのである。(3) 斯くの如き渠濠の用途は、交通用、用水用、惡水用などその他種々の目的に掘鑿せらるゝ場合を豫測されようが、しかし第一に考えられるのは、いうまでもなく軍事的なもので、主として防禦用として構營されて居り、時勢の變移と共に、當時段々發達していつた軍事上における城廓の出現に相照應したものであると考えているのである。大和の環濠部落に就いても、多少の型式は

あれ、それらはいずれも起原としては中世を溯るものではなく、部落民の自衛と特殊な大和の國情から發達した型式であり、たゞ條里式の部落を原型として成立したゝめに、單に方形もしくは長方型にはまつた環濠を有することゝなつたものと解していられるのである。

牧野氏の指摘されるように、濠の用途ももちろん問題ではあるが、さりながらいわゆる環濠部落が日本村落型の代表とするに足るほどの普遍的なものであろうか、疑問なきを得ないのである。聚落の周圍に堀をめぐらすことは、なんといつても大和の特色であつて、しかも大和にあつても大和全體に見る現象ではなく、それは大和平野に限られているのである。牧野氏は堀を以て中世起原の防禦的意義を有するものと解されているのであるが、ところが、かつて堀を以て圍繞せられていたものをも入れて、いわゆる環濠聚落なるものは大和平野においていくつばかりあるのであろうか。堀井甚一郎氏は數え得るもの八四とし、[4] 野村傳四氏は現存のもの八十數箇處、古く存したものを合わせるとその數約二倍に達するといわれる。[5] ところがこれを詳細に吟味するときには二二〇ばかりを數えることができるのであり、その八〇パーセント以上は一〇〇メートルの等高線以下の土地の低い所にあり、とりわけこの平野における河川合流地域に卓越しているのである。このような分布的檢討及びその他の臨地調査の結果によつて、私はかつて環濠聚落を一種の低濕地聚落の特色として指摘するところがあつた。[6]

三

この問題は終戰後、フィールド・ワークの風潮が漸く盛んとなつてくるにつれて、またもや地理學や史學の方面からとりあげられるところとなり、西日本地理學會が設立されるや第一回のフィールド・ワークがこれに向つてなされたのであつたし、立命館大學、京都大學の地理學教室もしばしばこの問題についての巡檢を試みたのであつた。その成果として京都大學の藤岡謙二郎教授は「畿内の環濠聚落の問題」と題して『學藝』誌上に、[7]「日本の聚落」と題して同氏編、立命

館大學刊『日本の風土』[8]に詳細報告されるところがあつた。藤岡教授によれば、環濠聚落の地理的分布はひとり大和平野のみに限らず、牧野氏が一部に注意した攝河泉にまたがる大阪平野南部地域や、さらに山城盆地南部の低濕地、また近江の湖東平野にも分布していることであり、さらに畿内だけにとゞまらず、九州の佐賀平野、筑後川中流の平野、濃尾平野、その他甲府盆地のごとき地域にも分布がみられるとし、いずれの場合を檢討しても、環濠聚落を以て低濕地聚落であるとされるが、しかし中世的な景觀が多い點を指摘しておられる。

然るに、人文地理學會の編集になる人文地理新書、第二卷『人口と聚落』篇においては、環濠聚落を以て中世以降農民の自衛或は領主的原因による防禦的村落であるとし[9]、牧野説を踏襲しているのである。

大和の新進史家堀部日出雄氏は、大和を郷里とし、大和に目下居住される關係から、大和の環濠聚落については可及的に史的究明を加え、牧野説と同樣、その起原は中世以前に溯るものではなく、古記錄によれば文和年間を最も古く、以後室町時代に入つては下剋上の風潮、社會的動亂のため、續々構築されたものとしている[10]。

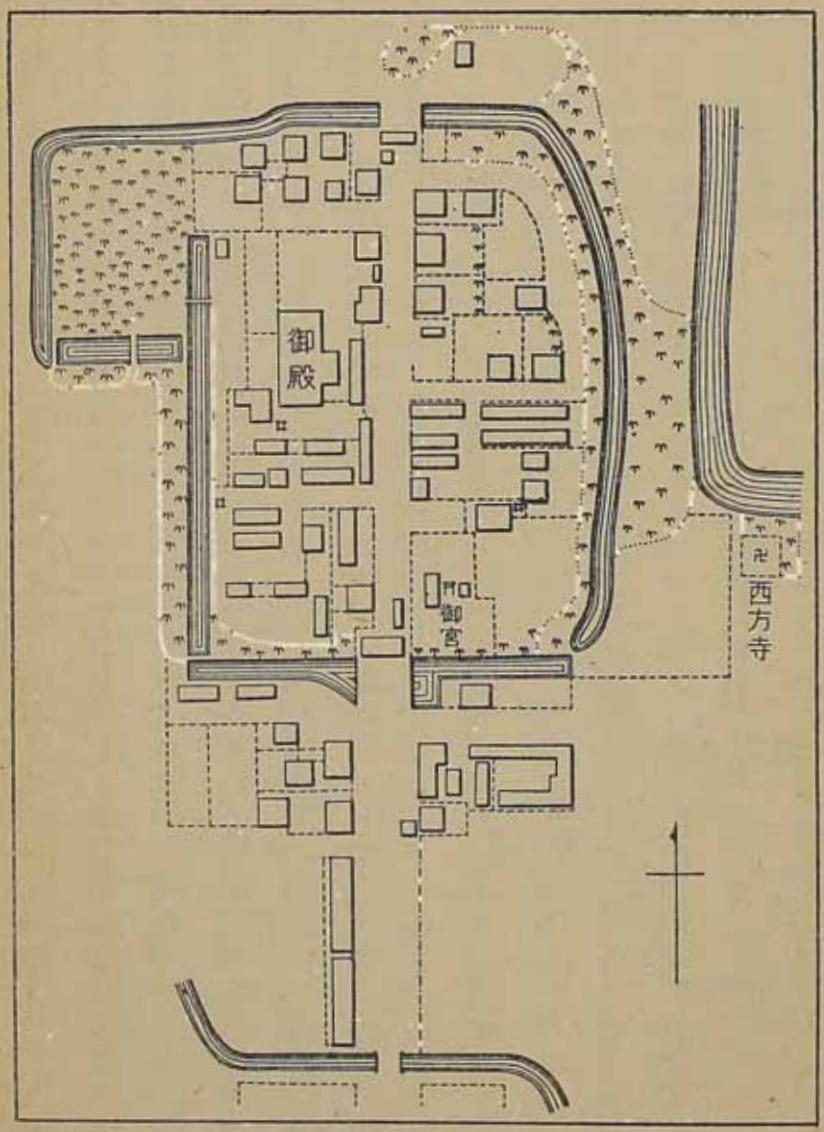
その他の人々の所説も、低濕地聚落とするか、中世の防禦的性質を帶びるものとするかのいずれかを支持するものであるとみることができよう。

ところが、最近米倉二郎氏は、福岡市比惠における先史時代聚落跡が周濠によつてめぐらされていたという九州大學史學研究室の報告から類推して、佐賀平野の環濠聚落を以てこのような先史時代村落の傳統であるとされた[11]。

かくて今やいわゆる環濠聚落の問題は、たゞに地域的に擴大してきたのみならず、環濠の起原の時代についても所説區々となるに至つたのであるが、果して環濠聚落の本質は如何なるものであろうか。これを明らかにするためには、この環濠聚落論が展開され來つた經緯について、少しく顧る必要を感ずる。

小川琢治博士が理科大學地質學科の御出身であられて、京都大學文科大學史學科に地理學教室が創設されたとき、その主任教授として來任され、學生を指導するのに種々御苦心になつたことは仄聞するところであるが、先生は聚落の研究を文科の學生の研究題目に恰好なものとしてとりあげられた。そしてその研究の一方法として、地表に殘された文化現象のレリックを手がかりとして、その機能を探究しようとされたのである。あたかも尾骶骨や盲腸が、今日なんらの用なくして體内に殘存しているものゝ、かつてはその機能をもつていたであろうとする如くに。そしてその一つの試みが、大和平野の村落の周圍に殘つているが、今やその機能が不明となつているところの堀であつたので、われわれにその研究を慫慂され、自らこれに垣内堀と名づけ、大和平野の村落を垣内式村落と呼稱されていたのであつた。

第一圖



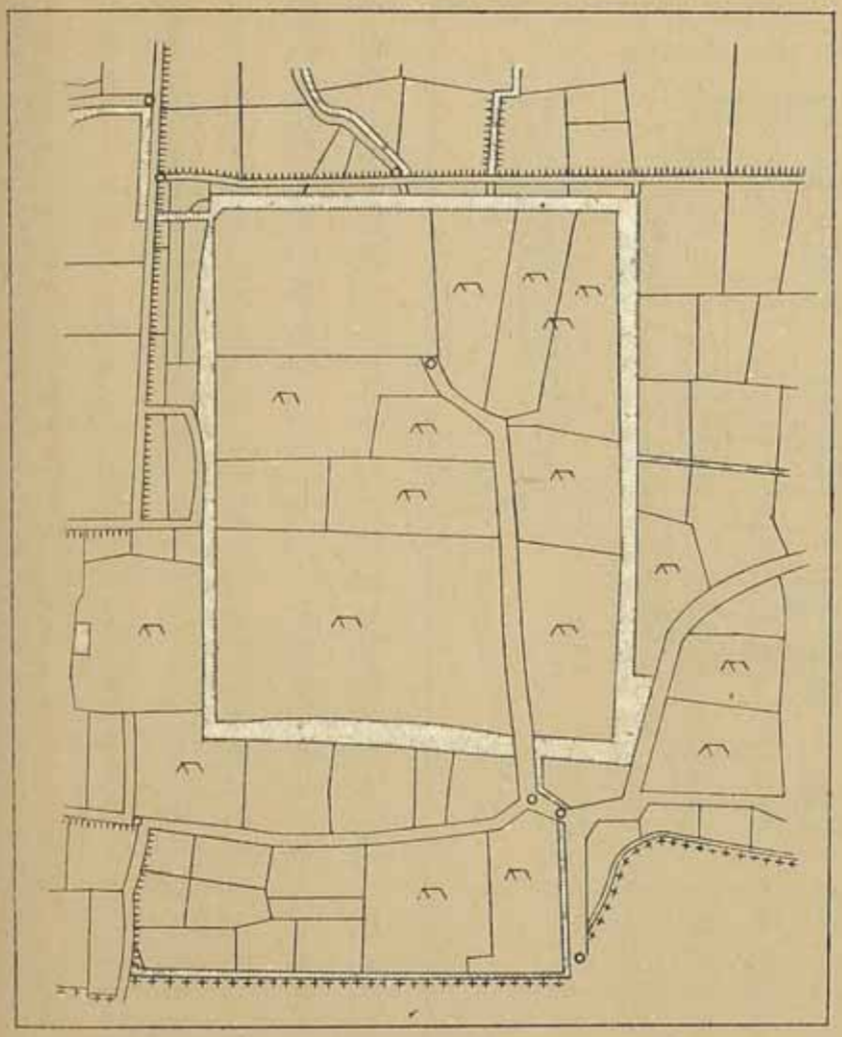
圖古落聚重戒

小川博士の所謂垣内式村落については夙に私見を述べたことがあつたが、[12] 先生の教を受けられ、當時堺市史の編纂に當つておられた牧野信之助氏は、堺市の周圍を圍繞している濠、同じくそれに近い平野郷の濠などに注意を拂われていた際のことであり、もとから土地及び聚落の問題に異常の興味と關心とを有して居られ、努めて臨

地研究を行われていたので、足を大和平野にのばし、その同じ眼を以て、氏のいわゆる環濠聚落なるものを見られたのである。大和平野の多くの環濠の中には、勿論そのような中世起原の防禦的性質のものもあるので、氏のあげられた類似聚落は確かに防禦的意義をもつものであろうが、しかしこの若干を例證とし、それを以て大和平野にある二百有餘の環濠聚落のすべてを説明したものとすることはできない。防禦起原の環濠聚落とならば、牧野氏の例示されるよりも、もつと典型的なものをあげることができよう。例えば平野の南東部にある戒重聚落の環濠は、聚落の防禦を目的とするために造られた見事なものであつたことは、古圖の明らかに示すところである（第一圖參照）。ところがそうした環濠が早く消失して、今日殘存しないのは何を物語るものであろうか。豪族屋敷に起原する防禦を目的とした環濠は、關東地方にもその例があるのであつて、現在小田原市に合併されている舊下府中村の下堀聚落のごときは、まさしくこの種に屬するものである（第二圖參照）

この聚落の起原については、次のようなことが記錄されている。すなわち武田信玄の旗下で志村金右衞門嘉幸なるもの、當所で高一萬石餘を所領していたが、武田勝頼が天目山で討死した後は北條家に從つていたけれど、天正十八年北

第二圖



下堀聚落

條氏沒落後、こゝに土着したものであると。[13] 後、環濠内で分家が行われて、今南東隅の一戸を除いた他の十戸はすべて同姓の志村を名乗つているのであるが、この聚落の現景觀においては明瞭な環濠聚落と見ることができる。幅一間餘の堀は周圍になお殘存しており、堀の内側の聚落周圍は土壘のように盛り土でとりまかれ、そこが竹藪となつているのである。

近古における豪族屋敷に堀をめぐらしたものがあることは、近江の例を西岡虎之助氏が紹介されているが、[14] 同様のものは福井縣敦賀市郊外にある粟野村市野々にあり、[15] 北陸では富山縣や新潟縣にもある。その他信州では更科郡八幡村の松田千里氏邸がこれで、今表にのみ殘つているが、堀をめぐらしていたものである。かくの如きものは大和平野にあつても田原本から西北、川西村吐田に至るまでに數戸を目擊することができる。中でも上窪田聚落の石井・中兩氏邸は同じ内堀と外堀とに圍繞されている。そして中氏邸へ至る内堀には、はね橋が架せられているのである。

小川博士がレリックである堀からその有する意義を究明しようとされた努力から離れて、牧野氏によつて環濠聚落という呼稱が提案されてからは、景觀上水路を以て繞らされた聚落のすべてを包含するように解釋した人々は、單に類似の外形のみから判斷して、この種聚落の分布範圍をます〳〵擴大して、遂に佐賀平野にまで及んだものであつた。しかしこゝに注意すべきことは、單に外形的な形が多少類似しているからとの理由でそれらを同一視できないことは、あたかも鯨が鰭や尾を有し水中に生活しているからとて、これを魚といえないと同様なことは自明である。しかも大和平野の環濠だけについて考えてみても、一口に環濠とはいつても、決して單一なものでないことは前述の點からも想像されるところである。まして廣範な地域に求めるとなると、いろ〳〵複雜なものがあるので、それにはそれぞれの地方の地域的特色が表われているのでないかどうかということにも注意しなければならない。とりわけ地理學的な立脚點に立つときにおいては、なお更のことである。例えば佐賀平野の環濠は、單に聚落の周圍をとりまくだけでなく、米倉氏が多島式環濠聚落の名稱を以て呼んだように、濠の構造がなか〳〵複雜で、しかもこうした濠はひとり聚落ばかりでなく、

耕地をも繞つているのであつて、管見によればこれらは有明海北岸の低濕地開發によるものゝごとく、むしろ揚子江下流のクリークにも比せらるべきものであろう。

五

この問題の出發點をなした大和平野のいわゆる環濠聚落にしても、かゝる居住現象には大和平野の地域的特質がにじみ出ているように思われる。そこで私は大和平野における環濠の性質を明らかにするために、飜つてこゝに少しく大和平野の自然環境についてみる必要を感ずるのである。

まず大和平野を圍繞する山地の性質についてみる。東西の兩山地は地壘からなつているので、さまで高くはなく、生駒・金剛の山地で六四二メートル（生駒山）一、一一二メートル（金剛山）に及び、東部の笠置山地では六一三メートル（神野山）である。この生駒山脈は大和平野からすぐに聳立するのでなく、これと並走する矢田山脈、さらにその前面に西京丘陵があつて大和平野に臨んでおり、南にも馬見丘陵があつて、漸次的に高度を增しているのである。地帶構造線に沿い、あるいは河川によつて解析されて、幾多の峠道がこれを横斷している。中でも西側の山地は、川沿いの谷道のほかに、山越えの峠道も發達していて、上代日本に地中海的役割を演じ、大陸文化の流入路をなした瀨戸内海の東緣に通じている。北部はさらに低夷した奈良丘陵によつて山城盆地と相隣しているが、南は畿内で高度の最も大きな紀和山地に續いている。

この紀和山地は、わが國における最多雨地域をなしているが、山地の水を集めた十津川・北山川は合して熊野川となり、横谷の地形を示しつゝ太平洋に注いでいる。山地北部の水を集める吉野川も、西流して紀ノ川となり、和歌山において紀伊水道に入つている。その上東部山地の水は名張川となつて伊賀盆地を迂回し、伊賀川を合して木津川となり、その他の東部山地の小河川もこれに注ぎ、山城盆地を流れて淀川に合流している。したがつて大和平野へは龍門山地以

北の水が集るにすぎず、南東隅から流れ出す初瀬川を主流として、南方からは寺川、飛鳥川、曾我川、葛城川、高田川、葛下川の諸流が、北方から佐保川、富雄川、龍田川の諸流が大和平野の最低部方面へ流れてきて、大部分は河合附近（海拔四〇メートル）に集まり、大和川となつて西流して、王寺から生駒・金剛山脈を横斷し、龜ノ瀬峽谷を作つて大阪平野へ流出している。

わが國土がアジア・モンスーン地域に屬している地理的性格から、河川を統禦することが土地開發の上において何より重要であつたことはいうまでもない。ところが大和平野では、どの川をとつてみてもその規模が小さかつたので、技術段階の未だ低度であつたわが上代においては、國土のほゞ中央を占めるこの大和平野こそ、開拓が比較的最も容易に行われ得た土地であつたことは看過し得ないところである。すなわち、盆地の四周を流下する上述の小河川は、いずれも山麓に傾斜のごくゆるい小さな扇狀地を展開しており、一口に大和平野とはいうものゝ、實はこれらの小扇狀地が複合して成れるものである。そしてまたこの大和平野全體が、河川流路の方向が示す合流點に向つて、極めてゆるやかながら傾斜していることは、この地域の二萬五千分一地形圖の等高線についてみたゞけでも、容易に了解し得るところであろう。かくの如くであるから、遺蹟や遺物發見地の密度が明らかに示しているように、大和平野が開かれたのは山麓線に沿う地帶からであつたであろうが、また容易に沖積平野にのり出し得たとみることができよう。かくて大和平野の面そのものが早く開拓され、古くから耕作が行われ、これを基盤としてわが上代文化が咲く花の匂うが如く展開されたのも、また容易にうなづかれるところであろう。

わが國の古い班田制に基くところの條里制が施行された地域は、今日なお殘存する地名のほかに、景觀としての耕地區劃や道路景によつても窺い得るのであるが、そうした文化景觀を典型的に示す所は、大和平野にしくはない。それに平野の形にしたがつているとはいうものゝ、このように東西南北に整然と地割され、道路も同樣に東西南北に通じているところは、蓋し類稀なものであろう。近江の湖東平野にしても、和泉の海岸平野にしても、條里の遺構は見得れ、湖

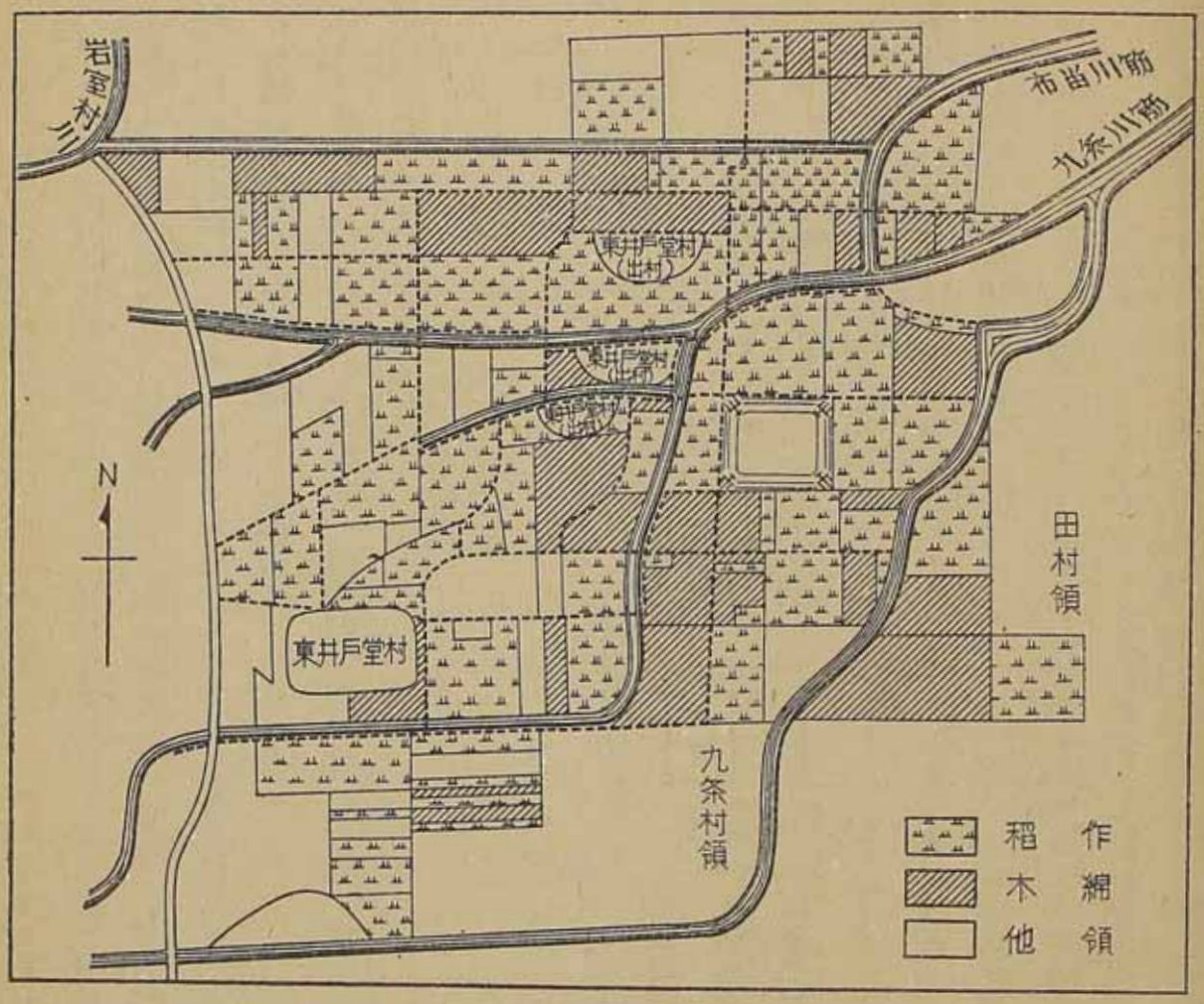
岸線あるいは海岸線に適應して、その方向がゆがめられているのである。ところが大和平野では川までもがこの方向を示し、直角に屈曲しているのは、前述のように河川が小規模なもので、早く統禦されたことを示すものであると共に、川そのものが、古くから米作中心の耕地に對して、灌漑水路としての役割を演じてきたものであることを物語っている。

さはさりながら、これらの河川は、扇狀地の常として荒れ川の性質をもつていた。「世の中は何か常なる飛鳥川、昨日の淵ぞ今日は瀬となる」[16]と詠ぜられたのは尤もである。しかも淺い水源地が森林の伐採によつて次第に美林がなくなり、既に早く藤原宮を造營するときに近江田上山の木材にたよつていたほどであつたから[17]、大和平野の河川は霖雨や台風に伴う豪雨によつて砂を流してきたので、これらの河川はまた天井川の性質をもつているのである。梅雨の候と台風期に一年中の雨量がかなり集中している（第六圖參照）ことは、屢〻洪水の害を繰り返させた。

他方またこの地域が瀬戸内水系に屬する盆地平野のことゝて、年計降水總量は比較的少なく[18]、平野をすべて水田として經營するには水が少ない嫌があり、幾多の灌漑用の池を掘つても干魃の年には用水が涸渇して、干害を受けることが多かつた。從つて水利慣行は嚴然と守られ、水利權の微妙に錯雜していることは大和平野の一大特色といゝ得よう。かくて春先きの頃には、川のぼりあるいはつゆはりといつて、村人は家ごとに老幼男女それぞれ御馳走を携えて、一村（現在の大字）または關係を同じうする村々共々に、井堰または樋管附近で儀式的作業をなし、後酒宴に移つてめいめい歡をつくし、家に歸る習慣ができていた。これは子供等が指折り數えて待つた樂しい年中行事の一つで、このように樂しみの中に水利の狀況を知らしめ、水利關係相互間の圓滿を期する手段としたという。

洪水と干害、このような兩極端の現象が大和平野における地域的特色として指摘されるのである。

第三圖



東井戸堂土地利用圖　(天明6年)

このような地域の特色が、村落がよつてもつて立つ耕地の經營に如何に表われているであろうか。

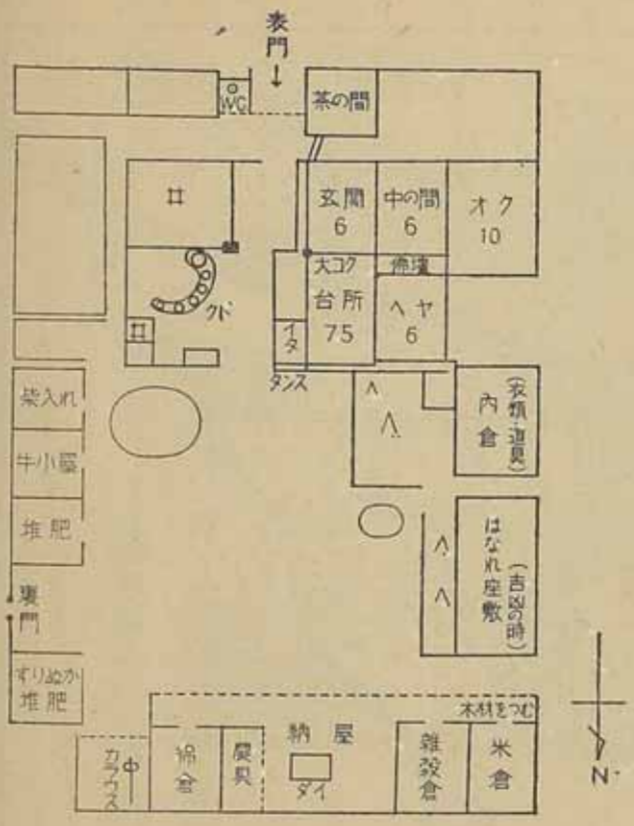
打ち續く平野に水田が開けている姿は既にふれた。それに大和は西瓜の名産を以て知られている。七・八月の候この地を訪ねると、西瓜畑に累々と大きな實が横たわつている様は、好もしい風景である。これは西瓜の栽培が大都市の消費地を控えて有利であるということのほかに、他方には田用水が不足するので、一部を西瓜畑として水田用水を節約しようとするによることは否むことができない。それに砂質の土壌で、とりわけ夏の日でりの著しいことは、美味な西瓜を結實せしめ、大和西瓜の名を高からしめた。

西瓜のような重くしてこわれ易く、摘果の適期も比較的短く、保存も全くきかない嗜好品で、こうしたものゝ速かな輸送の方

法が未だ發達せず、消費地たる都市の需要が未だ起らなかつた以前には、この大和平野には棉が栽培されていたのである。すなわち江戸時代には、棉は米に次ぐ産物であつて、稻と共に本毛作とよばれ、その耕作割合は概ね米の七—六に對して棉は三—四であつた。（第三圖參照）棉の跡作には食糧としての麥や、燈火油としての菜種を作つたのであつたが、棉作跡の土地はよく肥えていて、施肥が少量でも上作を得たといわれる。しかしこの棉作の面積の割合は水ぬきの關係から概ね一定していたとのことである。

このように耕地に栽培される作物も、濕潤の米と、乾燥の棉、後には西瓜、近時はこれに加うるにスウィート・メロンが栽培されているのである。

第四圖



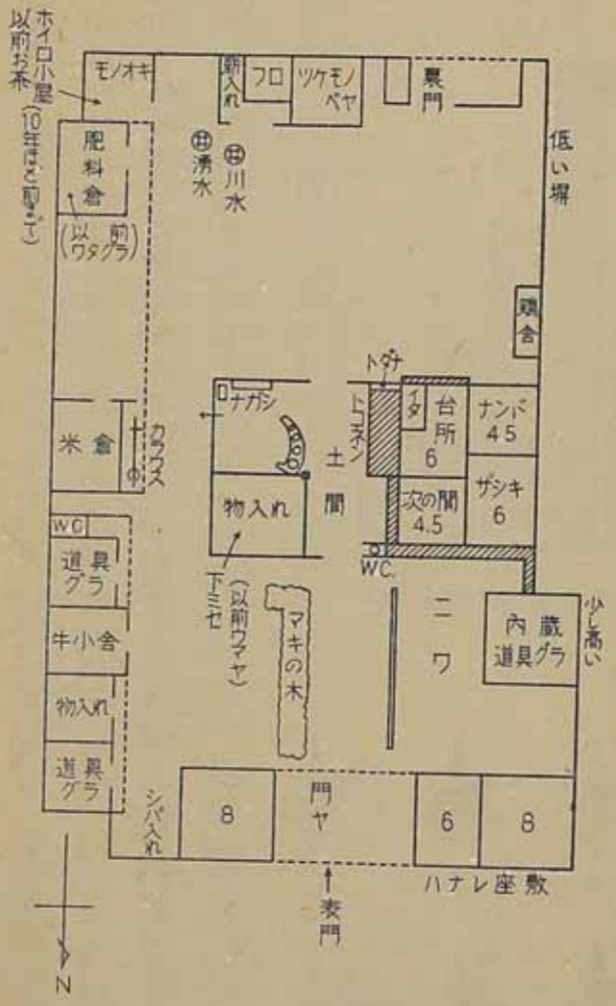
田井庄　金星吉五郎氏宅平面圖

村落を構成する民家についてみても、現在はすつかりその用途が變つているものゝ、諸處になお綿倉と呼ばれている倉が殘つている。（第四圖及び第五圖參照）これは既に述べたように、かつて大和平野に棉が栽培されていたとき、その收穫物を入れる用途にあてられていたものであつた。

おも家の玄關入口の上に、例えば環濠聚落であるところの高市郡金橋村新堂聚落の堀部日出雄氏宅におけるように、單に一本の竹竿が横にかゝつていることがある。たゞこれだけを見たのでは、この竹竿が何の用途に供さ

れていたのか全くわからないであろう。ところが山邊郡二階堂村田井庄の金星吉五郎氏宅では、この玄關入口の上に横たえられた竹竿の一端に、竹をあみ澁紙をはつて作つた古びた防火バケツが數個ぶら下つている。今は片方によせられてかゝつているが、もとはバケツを一箇ずつ並べて竹竿にかけておいたという。萬一火災のときには、このバケツを用いて、リレー式に、聚落を圍繞する堀の水で防火しようとして備えていたものである。さて非常の際池の樋をぬいて水を送つているようでは、時間がかゝつてとても火急の間には合わないのである。それに聚村であつて、民家の屋根が草葺であるにおいては、火災に對して細心の注意を要求するようになることはいうまでもない。かつて田井庄には部落共有地として宮田地が五反程あつたが、今は一・五反あるなしで、あとは堀にした。これは前栽聚落に火事があつて、その苦い經驗によるものであつた。つまり水のためであつたのである。

第五圖



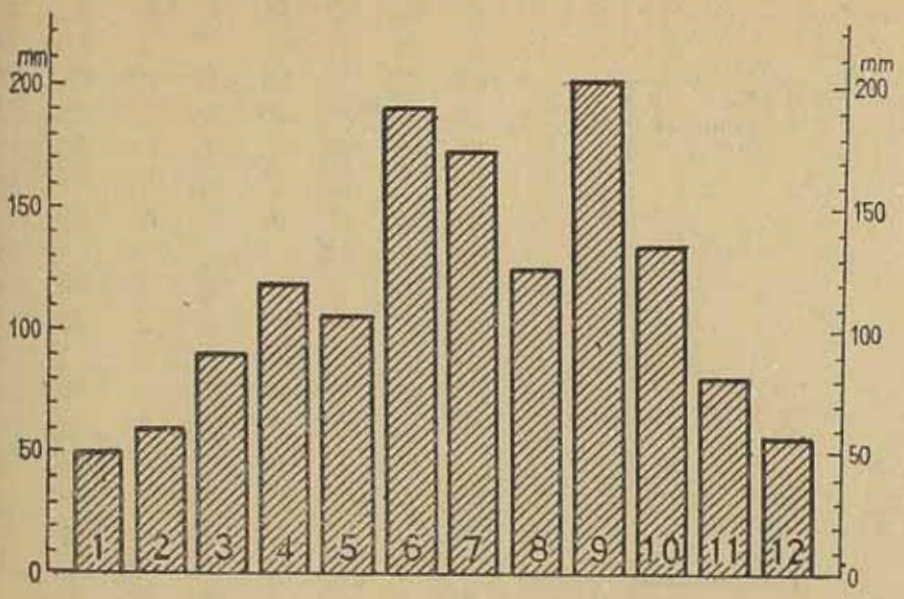
吉田與村氏宅平面圖（箱棟造り）

民家が防火に留意していることは、もつと根本的に民家の構造それ自體に明らかである。それは大和造りでは、釜やかどこでも家の東側に設けられていることの一つによつても了解し得るであろう。（第四圖及び第五圖參照）大和平野の民家は農家のことて、日のよく當る干場を有すべく、北面して北から入るのを原則とし、背後の南に日をよく受けて干場とする庭を有している。環濠聚落内の道路が、小川博士[19]や石橋五郎博士[20]のいわれるように格子狀をなすもので

はなく、藤岡教授のいわれるように袋小路を有しているが、この袋小路は藤岡教授の指摘されるような特に深長な意味のあるものではなく、聚村であつてそれぞれの民家が南に干場をもつため、主道路から屋敷地への連絡路をなすものである。それが耕地の少ない畿内のこととて、聚落内の道をなるべく狹くしたものである。關東平野の農家とは違つて、近畿地方では收穫物の乾燥が終ると、干場の庭をほり返して耕地に利用しているように、土地利用の集約化に通ずるものであろう。とも角このようにして民家の北より入つて、右勝手であるのが普通のやり方で、いゝ換えると釜やは左側すなわち東側にあるのが通例である。これはあるいは西方淨土の思想から佛壇を西側に置くことによるのかも知れぬが、しかし大和平野では周年西風が多く、別して降雨が少なく乾燥期である冬（第六圖參照）に西風が卓越する（第七圖參照）から、常に火を用いるかまどを風下に置こうとする考の表われであると思われる。

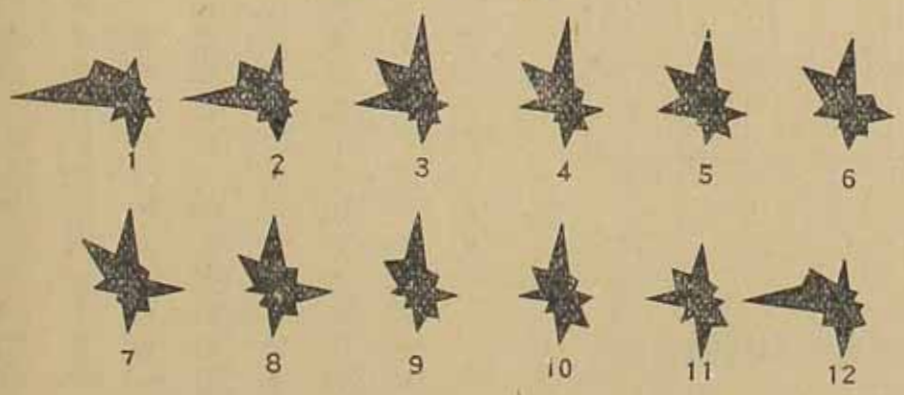
このように民家の構造が乾燥に對應しているにかゝわらず、大和平野の民家におけるおも家の屋根が、高塀をもつところの高塀造り、またはこれから更に進んで箱棟造りになつ

第六圖



大和平野（平均）月別降雨量圖（八木町橿原測候所）

第七圖



大和平野月別風向圖（八木町橿原測候所）

ているのはかなり興味がある。（寫眞參照）屋敷内におけるいろ〳〵の建築物の配置や、このような民家の構造は、われわれにすぐに大陸の影響ではないかとの考をいだかしめるのであるが、[21] この高塀造りにしてもとりわけ箱棟造りにしても、その起原はあまり古いものでないように思われる。このような建築樣式はわれわれに目立つて、いかにも大和民家の代表であるかのように思わせるが、實は一つの聚落内部において、こうした建築樣式をもつ家數の總家數に對する割合は、極めて少ないのである。[22] それにこのような構えの民家は、聚落内における富裕の家である。それに聚落の古圖をみると、民家が全體に草葺きになつている。これは圖上における家の記號であるととれぬこともないが、中には備前聚落の古圖のように高塀を具體的に表現しているものもあるから、聚落景觀をそのまゝ描寫したものと解すべきであろう。このように考えてくると、高塀造りや箱棟造りは、大和平野に多い民家の形式である切妻造りの妻側を、西風が雨を伴つてたゝきつけて損じるのを保護するために、初めは藁屋根の兩切妻を土で塗つて瓦葺とし高塀の形式となり、さらに後に棟の部分をも瓦葺にして箱棟となつたものであろう。

環濠聚落では、既に屋敷地が地盛りしてあるばかりでなく、土藏の如きも一段と床を高くしてはしごで出入するものがあるのも、單に濕氣を避けるというだけでなしに、洪水そのものを避けようとした努力の表われであると見ることができよう。

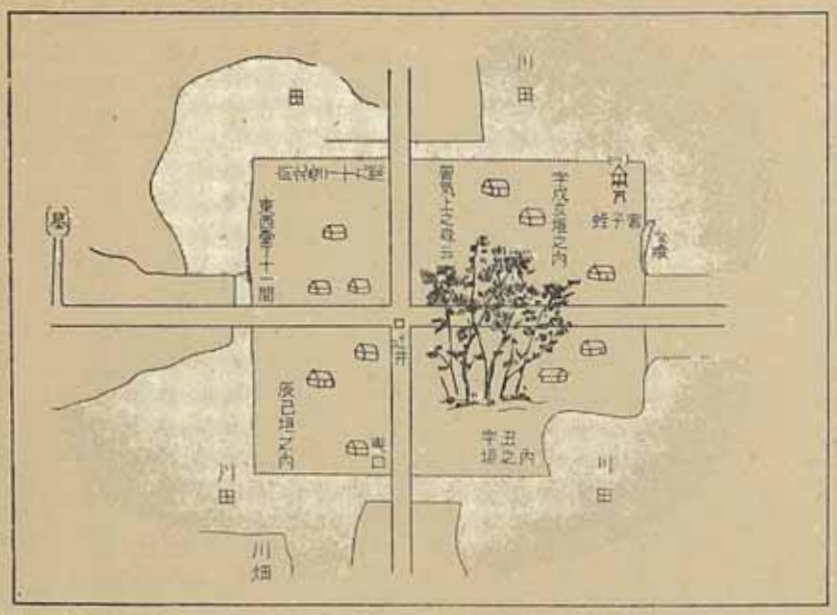
それに聚落の周圍にある林叢は、古圖によるといつそう著しかつたことが明らかに察せられるが、今では西と北とに殘存しているものが多いのであつて、これも以上のような防風と密接な關係があるのであろう。否、それは風に對してばかりではなく、林地が一段と高く、これによつてかつては洪水を防ぐのに大いに役立つたものと考えられるのである。

こゝにも乾燥と洪水との、大和平野の地域的特色がにじみ出ているのを見ることができる。

八

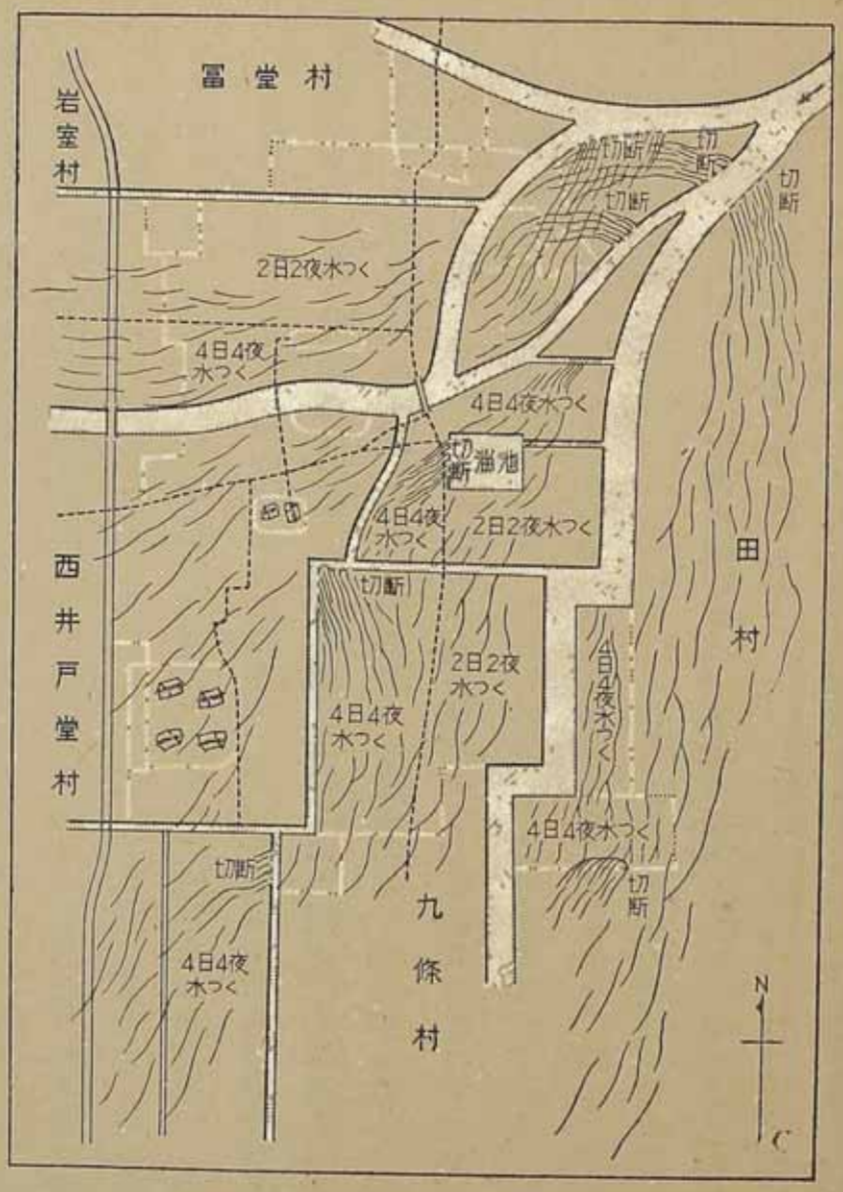
大和平野における耕地の經營にしても、また民家にしても、この地の地域的特色である洪水と乾燥との二つの極端な現象に適應していることが知れた。これは大和平野における居住現象であるところの聚落の設營にあつても同様であつた。（第八圖參照）然らば洪水に對するために如何に設備されたかについては、既に他の機會において解明するところがあつた。[23] こゝにはその要點をあげると、この種聚落では屋敷地の地盛りをしているのが一般であつて、恐らくこの土は遠方より求めたものではなく、周圍よりとつた跡が堀となつたものであろう。こうした現象は日本ばかりでなく、臺灣では農村が建築用粘土（いわゆる土埆作りとするための天日製煉瓦製造原料）を掘りとり、その跡が環濠聚落狀を呈し、これがまた兼ねて部落共有の水牛の水浴所、家鴨の飼育所となつているのである。中國でも聚落周圍の土壘を築くために土をとつたあとが濠となつていることがある。大和平野ではかくすることによつて、洪水の際には一應こゝに水を貯えることもでき、何よりこの水は水田耕作用の灌漑に用いられる。それどころかこの堀を灌漑用水の通路としているものすらあるのである。堀のすぐ傍に續く築土に竹藪を設けたのも、必ずしも堀部氏らのいわれるような戰鬪用防禦のためではなくして、既に述べたように洪水を防禦するためであつたろう。かつては洪水が盛んであつたこと

第八圖



八木町古圖

第九圖



東井戸堂古地圖（慶應4年5月15日）

は、河川が堅固な堤防で守られこゝにも竹藪が續いていたことによつても察せられるし、また洪水を描いた古圖によつても明らかである。（第九圖參照）そして一たん水がつくと、二日二晩水ずかりであつたとか、四日四晩水ずかりであつたと述記してあるように、東井戸堂聚落（五二・五メートル）でさえそうであつたとすれば、それよりさらに低い三宅村や川西村の諸聚落の狀態は思半ばにすぎるものがあろう。前に述べた新堂聚落の如きは南側の堀が大きく、土地は南から北の方へと傾斜しているにかゝわらず、南（及び東）側の土地を一段と高く築地しており、その南に堀があつた。北（及び西）側の堀の外側に築土があるのと著しい對照を示している。この盛り土の上がかつて竹藪で防がれていたことは、元祿年間の古圖(註)が明らかに示すところである。然るに河川が修築されてくると、日光を受けるため南東にあたる樹叢は伐採され、この側の廣い堀は埋められて水田となつた。北西側の堀が殘つているのは現に灌漑に用いられているからで、この部分は毎年堀さらえをやつているのである。

さきに見た戒重聚落の堀の如きも、織田氏が芝村に移轉すると共にやがて埋められて水田となり、今は堀のあとを追跡することもなかなか困難となつてしまつているのである。大和平野の農村内の道路の幅が極めて狹いのも、恐らく耕地を多く確保しようとした意圖の表われであるかと思われるのであるが、夙に人口密度の大きかつた大和平野において、なおこの堀を殘存しているのは、この堀が貯水・灌漑の便を與えてきたからであつて、平野に多數點在する池にしても棉作が廢止されてから掘られたものもたくさんあるし、田井庄聚落のように共有地（宮田地）を新たに堀にしたものもあるのである。[25] 既に述べたように、大和平野の河川は天井川で平素は水が少なく、池の水を利用しようとしても樋をおとして流して來るのには時間がかかるところから、用水として火災に備えた意味で殘存したことも亦決して僅少でなかつたであろう。

河川の修築によつて洪水の減少したこと、乃至そのために近年は洪水が殆んどなくなつたこと、池塘の增設、灌漑施設の改良、用水に地下水をも利用することになつて、昔日の如き干魃による干害が甚しくなくなつてきたことなどは、堀が多くは今や、濕潤より聚落を救い、聚落の惡水はけの如き觀を呈してから、既にこゝに年がある。なお灌漑に活用されているところはツユハリ、堀さらえが行われているものゝ、堀は淺くなり、西聚落の堀のように滯水性植物にうずめられてしまつたものもあり、かくて遂に環濠も場所によつては消失してしまい、殘存しているものもその機能を忘れられてしまつたように思われる。

九

以上見るように、大和平野の村落周圍の堀は、大和平野の地域性であるところの乾燥と洪水とに適應したものとして、村落居住樣式にこの平野の地域性がにじみ出ているものと思われるのである。河内の舊大和川河道沿いの環濠聚落、山城南部の環濠聚落の如きも、類似の自然環境を有しているものであつて、例えば山城南部にある八幡町外川口の

環濠聚落では、東南端に俗稱天滿宮なる神社があるが、この神社は火災、水害により古記錄を燒失した由報告されているのである。[26]

わたくしはかつて、日本聚落地理上の今一つの問題の礪波平野における散村の發達についても、小川博士、牧野信之助氏の所說に對して、礪波平野の扇狀地の地形に相應ずる庄川の水路と水の流量から、次に礪波平野の地域の特性から說明したのであつたが、[27] 大和平野の環濠聚落の問題についても、同樣に地域の特性を表わしているものと言い得ると思う。われわれが地理學研究において、時にあるいは經濟地理學、あるいは聚落地理學的な方法によつて分析的研究をなしても、所詮それらによつて綜合的に地域の特性を把握せんとするにほかならないのである。

擱筆にあたり、二階堂村に關する資料は今夏二階堂調査に行を共にした地理學教室全員の共同調査によつて得られたものであることを明記し、古地圖の借覽に便宜を與えられた櫻井高校日色四郎氏、同松田勇治氏、畝傍高校堀部日出雄氏、並びに圖版作成に盡力下さつた日本地圖研究所小野三正氏に深甚の謝意を表する。

註(1) 讀者は二萬五千分一地形圖奈良、郡山、櫻井、生駒山、信貴山、大和高田の各圖幅を參照されたい

(2) 小川琢治博士　近畿地方の土地と住民　京都府教育會刊（「人文地理學研究」昭和三年　所收）
同　博士　人文地理學上より見たる日本の村落　地球　五ノ四（「人文地理學研究」昭和三年　所收）
(3) 牧野信之助　散居制と環濠村落　歷史と地理　二七ノ一・二・三（「土地及び聚落史上の諸問題」昭和十三年　所收）
(4) 堀井甚一郎　奈良縣地誌　昭和十年
(5) 野村傳四　大和の垣內　昭和十八年
(6) 拙稿　日本聚落地理上の一問題　地理學評論　十八ノ八　昭和十七年
(7) 藤岡謙二郎　畿內の環濠聚落の問題　學藝　東亞地理特輯號　昭和二十三年
(8) 藤岡謙二郎　日本の聚落「日本の風土」昭和二十三年　所收
(9) 藤岡謙二郎編　人文地理新書第二卷　人口と集落　九八頁
(10) 堀部日出雄　環濠聚落の研究——特に大和を中心として——　昭和二十五年大阪歷史學會一月例會講演（要旨は大阪歷史學會

會報　第二號　昭和二十五年三月所收）

(11) 米倉二郎　原始村落の傳統　昭和二十五年十一月地理學談話大會講演（社會地理　三十號　昭和二十五年十月）

(12) 拙稿　所謂垣内式村落に就いて　地理教育　十六ノ六　昭和七年四月

(13) 嘉永六年　村方本末取調書　相州足柄下郡下堀村　志村本家

(14) 西岡虎之助　近古における土豪の屋敷　社會經濟史學・三ノ一（卷頭に屋敷圖をものせている）

(15) 敦賀郡史（因みにこの柴田事次氏邸は昭和二十四年五月二十八日　文部大臣により重要美術品として指定された）

(16) 古今集　雜

(17) 萬葉集　一　藤原宮の役民の作れる歌

(18) 橿原測候所（八木町にある）における一八九七年から一九四四年に至る累年平均降水量は一四〇八・八ミリメートルである

(19) 小川琢治博士　近畿地方の土地と住民　人文地理研究　二五四頁

(20) 石橋五郎博士　近畿地方の人文地理（人口及び聚落）日本地理大系　第七卷　近畿地方篇　四五三頁

(21) 島　之夫　日本民屋の變遷　一七九頁

(22) Hall, R. Burnett; Some Rural Settlement Forms in Japan. The Geographical Review, 21, Jan. 1931

二階堂村における各大字別調査の結果は次の如くである。　田井庄　切妻　七三%　大和棟　二一%、富堂　切妻　八一%　大和棟　一四%、八軒屋　切妻　八六%、九條　切妻　五二%、大和棟　四四%、筑紫　切妻　六七%、大和棟　二七%、横廣　切妻　八六%、大和棟　一四%、吉田　切妻　五六%、大和棟　四二%、備前　切妻　八一%、大和棟　一九%、井戸堂　切妻　七〇%、大和棟　二五%、合場　切妻　五八%、大和棟　三五%、小島　切妻　六七%、大和棟　三三%、嘉幡　切妻　五六%　大和棟　三九%、西嘉幡　切妻　八〇%、大和棟　七%、小城　切妻　四二%、大和棟　四二%、南菅田　切妻　六三%、大和棟　三八%、北菅田　切妻　九二%、大和棟　四%、小田中　切妻　六七%、大和棟　二七%、上總　切妻　四一%、大和棟　五九%、前栽　切妻　四四%、大和棟　二四%、喜殿　切妻　七三%、大和棟　二七%、指柳　切妻　六六%、大和棟　二七%　南六條　切妻　六六%、大和棟　三〇%、小路　切妻　六三%、大和棟　三三%、平等坊　切妻　六五%、大和棟　二九%、杉本　切妻　五五%、大和棟　三〇%、荒時　切妻　五四%、大和棟　四三%、藤川　切妻　八三%、大和棟　一三%、柳生　切妻　六九%、大和棟　二五%、稻葉　切妻　六二%、大和棟　三八%、岩室　切妻　四九%、大和棟　四九%、中村　切妻　七九%、大和棟　七%、上之庄　切妻　七四%、大和棟　一八%、下長　切妻　七八%、庵治　切妻　六九%、大和棟　二一%、

内庵治　切妻　一〇〇%、桑垣内　切妻　九三%、春日　切妻　六〇%、大和棟　三〇%、木ノ本　切妻　七三%、大和棟　二四%、溝幡　切妻　三六%、大和棟　二七%、出垣内　切妻　六二%、大和棟　三八%

(23) 拙稿　日本聚落地理上の一問題　地理學評論　十八ノ八　昭和十七年

(24) 堀部日出雄氏藏　新堂地籍圖

(25) 金星吉五郎氏談による

(26) 藤岡謙二郎　日本の聚落　「日本風土」六一頁

(27) 拙稿　散居村落について　歴史と地理　二八ノ四　昭和六年

拙稿　礪波平野の聚落景觀　地理論叢　第二輯　昭和八年